

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今回は前回に引き続き英国Leak社の製品が登場。コンパクトな初期と後期のモノラルプリアンプを紹介する。

本文 / 田中伊佐資

製品解説 / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)

撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)

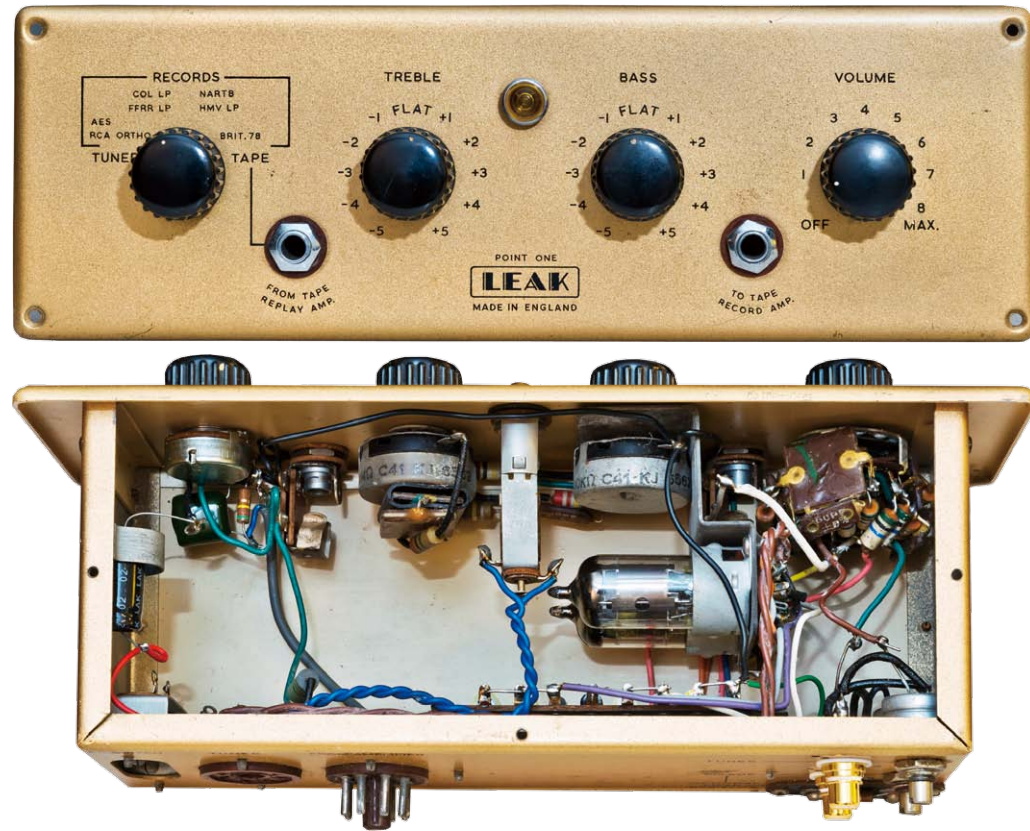
第40回 Leak LEAK Point one Pre-amp

Leak Leak社で1950年頃に開発されたモノラル仕様アンプのTL-12は、英国BBCのスタジオモニタースピーカー専用アンプとしても使用されることとなる有名なアンプ。そしてこの頃には、パワーアンプから電源供給される設計の小型プリアンプがセットで開発されている。モノラル、ステレオそれぞれの時代にスタンダードなPoin-oneタイプ、イコライザー回路が強化されたVarislopeタイプの2機種が発売された。それぞれ初期型、後期型モデルが存在しており、とてもシンプルな操作性と洒落たデザインが目玉のアンプだった。



LEAK Point One 初期モノラルモデル

1950年代初期に生産された初期モノラルプリアンプ。正面パネルは最小限の操作に必要なメインボリューム／電源スイッチを兼ねた入力セレクター、高域トーンコントロール、低域トーンコントロールノブの4個が付いているシンプルな設計。後ろのパネルはフォノとライン入力のみサブボリュームが付いている



Point One mono 初期モノラルモデルの正面。パネルの材質は金属製で正面ツマミの左から入力セレクターの(Phono は4種類のイコライザーが設定されている)、Treble、Bass、メインボリューム、その他にTAPE専用の入力、出力専用ピンジャックが設置されている

本機の内部。真空管はEF-86が2本搭載されている

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

Leak / LEAK Point one Pre-amp



Point one Plus 後期モノラルモデルの正面。パネルの材質はプラスチック製で正面ツマミの左から(Phono は4種類のイコライザーが設定されている)、Bass、Treble、Filter(高域ノイズカットフィルター)メインボリューム、その他にTAPE専用の入、出力ピンジャックが設置されている

本機の内部。真空管は EF-86 が2本使われている

プリもモノ化するとコマコマまで違う
洗練された箱庭サウンドがお洒落

リークのアンプを聴く後編は、モノラル時代のプリアンプを左右モノブロックに配してステレオ音源を聴いてみる。パワリアンプも同じくモノの「コト」だ。前編で聴いたプリアンプ、ポイント・ワン・ステレオの音も十分よかった。スピーカーは国産エンクロージュアにタンノイ10インチ同軸モニターレッドを入れたものだが、程がいい粋な音だった。さて今回はどうだろう。

まずは50年代製造と思われるモノプリアンプでレイ・チャールズ&ナタリー・コールの「フィーヴァー」を聴く。

プリアンプに限らずモノ時代の機器をベアにしてステレオ音源を聴く場合、左右の個体差が気になる。聴感上はまったく違和感がなく揃っていた。そして前編で聴いたステレオ版よりもやはり左右のセパレーションが良好。音場が一回り広い。

押し出しの力強さも確実に増した。パワリアンプならわかるが、プリでもモノ化するとこうも違うものかと舌を巻く。リークの洗練された箱庭的サウンドがお洒落だなあと感じていた僕は、ここにオーディオ的な面白さも見いだすことができた。

続けてウイリー・ボスコフスキー指揮ウィーン・モーツァルト・アンサンブル「セレナード 第13番」の大きなスケール感を味わう。プリアンプのスマートな見た目と音にギャップがあつて不思議な

感じすらしてきた。次はさらにもっと古い40年代に製造されたモノプリアンプを試す。同じく「フィーヴァー」を聴くと、もう一段濃厚になった。ワイルドでスモーキー、野太いといった印象。ハイファイデリティではなくちよつとした演出をそこに感じる。

レイ・チャールズはともかくとして、ナタリー・コールの声はもつとピチピチしているはずという突っ込みはあるのだが、僕としては透明感よりもソウルを歌声に求める口なので、感覚的にはこちらのほうが気持ちいい。

往年のジャズ、たとえばオスカー・ピターソンの音質チェック定番曲「ユールック・グッド・トゥ・ミー」はベースがプリプリと走っていたが、ウェス・モンゴメリーのCTI録音はギターがモッコリして精彩に欠けた。このプリは微妙にソースとの相性があるようだ。

リチャード・タニクワの「パツハ無伴奏チェロ組曲」は新しい録音ではあるけれど、波長がばつちりうまく合った。陰影感を秘めながら朗々とスピーカーを歌わせる。10インチタンノイの力を出し切ったパフォーマンスだった。

新旧プリはどちらが好みかと問われれば、僕は迷わず古い方を選ぶ。万能ではないが、ジャンルや録音によってこちらからツボにハマっていく聴き方をしたい。それと童顔の風貌が妙に可愛らしい。